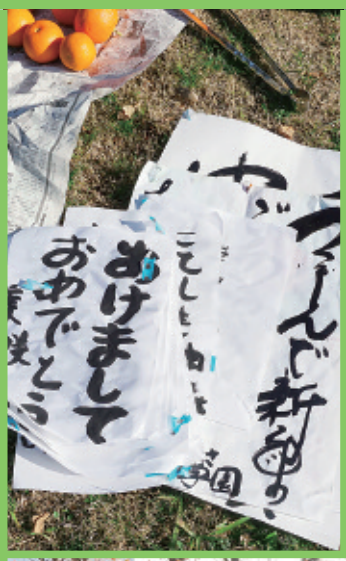
ASAHI GAWASOU DAYORI



無病息災願い「とんど焼き」。あおば（左側上下の写真）と
わかくさ学園（右側の写真3点）の行事から（8面に関連記事）

旭川荘だより

vol. 211

2016.02.01 発行

発行／社会福祉法人 旭川荘
〒703-8555 岡山市北区祇園866
TEL 086-275-0131 FAX 086-275-5640
http://www.asahigawasou.or.jp

CONTENTS

P2 荘内各施設で成人式
P3 療育園にXマスプレゼント
P4-5 特集 JICAボランティアに参加して
P7 レシピ 鮭の粕汁
P8 親和会芸術祭

2年ぶりに後楽ホテルで開催された
「100枚のマット展」（3面に関連記事）

利用者の門出を祝福
児童院など荘内各施設で成人式

旭川荘の各施設で成人式が行われ、職員や家族、ボランティアが
大人の仲間入りをした利用者の門出を祝いました。

旭川児童院

旭川児童院は1月14日に開催。新成人6人と家族、ボランティアら合わせて約80人が出席しました。はじめに、支援課職員が制作した写真スライドで新成人を一人ずつ紹介。楢原幸二院長が「健康を維持するために適度に運動し、芸術や文化活動にいそしんでください」とあいさつしました。岡山市成人式の実行委員代表が祝辞を述べたあと、新成人と家族らで鏡割りを行い、参加者全員で乾杯しました。続いて、岡山市の担当者が新成人に「20歳のパスポート」を贈呈。真庭市蒜山花園地区有志代表が出来立ての「紅白もち」を手渡しました。

蒜山花園地区有志の皆さんによる餅つき

新成人からはそれぞれの家族らへ感謝を込めて花束をプレゼント。保護者を代表して井口久美さんが「大勢の人に支えられこの日を迎えることができた。これからの人生も元気に楽しく充実したものにしてほしい」と感謝の言葉を述べました。最後に、児童院利用者による「ウイングバンド」と全日本エレクトーン指導者協会の皆さんが、新成人が生まれた20年前のヒットソング「TOMORROW」を演奏し、全員で合唱しました。

家族や職員らと記念撮影する新成人6人（旭川児童院）

吉備ワークホーム

吉備ワークホームでは1月7日、利用者と職員約50人で新成人の宇那木美緒さんをお祝いしました。式には宇那木さんの両親も出席。利用者を代表して南裕二朗さんが「これからいろんなことに挑戦し、一緒に歩んでいきましょう」と激励。続いて、中村誠一所長から花束と記念品が贈られました。最後に、宇那木さんが「ここでの生活と仕事をがんばります」と決意表明しました。

宇那木さんは母親が二十歳の時に着た洋服で出席（吉備ワークホーム）

あおば（旧わかば青年寮）

あおばの旧わかば青年寮では、1月12日に成人を祝う会を開催しました。利用者と職員44人が出席。成人を迎えた図子英駿さんの生い立ちを紹介するスライドを全員で鑑賞した後、料理が得意な図子さんがホットケーキを焼いてみんなに振る舞いました。最後は、松本好生所長からエールとともに花束と記念品が贈られました。

料理の腕前を披露する図子さん（あおば）

せとうち旭川荘

せとうち旭川荘では1月15日に開催。家族や利用者、職員約70人が出席しました。式では小林由典所長が「成人を迎えた3人を利用者や家族、職員みんなでお祝いが出来ることを嬉しく思っています」とあいさつ。新成人3人が一言ずつ抱負を語り、小林所長から記念品が手渡されました。その後、みんなで乾杯し和やかに会食を楽しみました。

乾杯する3人の新成人と家族（せとうち旭川荘）

この他、みなみ愛媛通園センター（11月26日、新成人2人）、旭川荘真庭地域センター（1月14日、1人）、あおば・旧みどりワークセンター（20日、1人）、ひらた旭川荘通園センター（22日、1人）でも新成人を祝う行事が行われました。

手仕事の成果を実感! 100枚のマット展

愛育寮織り工房の結び織りマットを展示・販売する「100枚のマット展」が1月15日から1月25日まで、後楽ホテル（岡山市北区平和町）で開かれました。このマット展は、利用者の日ごろの作業活動を幅広く知ってもらおうと2年に1回開催しており、今回で3回目となります。

古いセーターをほどいて、洗って、結ぶ。この工程を利用者が毎日丁寧に行い、仕上げてきたマットは一つも同じものはなくすべて1点もの。初日は大小合わせて136枚が並びました。

お気に入りのマットを選ぶ買い物客

開催を楽しみに待っていた人や、宿泊客、道行く人たちもショーウィンドーから見たマットに惹かれてギャラリーに立ち寄り、会場がにぎわいました。宿泊でホテルを利用していた女性客は「手触りも座り心地もいい。手作りの温かさを感じるいいマットに出会えてよかった」と好みのデザインを選んで購入。当日は、織り工房の利用者8人も会場を訪れており、マットを買ってくれた人に笑顔でお礼を伝えていました。

大小合わせて136枚の結び織りマットを展示・販売

利用者の守時貴子さんは「私が作ったマットが喜ばれ、使ってもらえることが嬉しい」と話し、日ごろの手仕事の成果を実感していました。

療育園にXマスプレゼント 両備バス、カバヤなど

両備バスの新人バスガイドさん5人が12月21日、恒例の新人研修で旭川療育園を慰問に訪れ、子どもたちと交流しました。

ガイドさんらは、出迎えた約30人の子どもたちにお菓子の詰め合わせをプレゼントした後、手遊び歌「おおさかのうまいもん」を岡山バージョンにアレンジして披露。子どもたちも一緒に岡山弁のフレーズを歌い、「きびだんご」や「ママカリ」などの名産品を表情や手の動きで表現しました。

寸劇「因幡の白兎」もあり、ガイドさんは手話を交えて熱演。子どもたちから大きな拍手が送られました。

子どもたちに手遊び歌を披露するバスガイドさん

「さくぱん」が病棟にもやってきました

またクリスマス当日の12月25日には、カバヤの宣伝カー「くっきー君」と同社のキャラクターの「さくぱん」が療育園を訪れ、子どもたちを喜ばせました。子どもたちは、「くっきー君」の前で写真を撮ったり、コミカルな動きで愛嬌をふりまく「さくぱん」に抱きついたりして触れ合いのひと時を楽しみました。今回は「さくぱん」が各病棟を巡り、外に出られなかった子どもたちも一緒に楽しむことができました。

このほか、12月19日には、旭川児童院家族会らで立ち上げたNPO法人「ゆずりはの会」のメンバー約90人が児童院を訪問。ディズニーキャラクターのコスチュームで各病棟を回り、利用者を楽しませてくれました。

特集

JICAボランティアに参加して

JICA（独立行政法人国際協力機構）が開発途上国に青年海外協力隊を派遣し、昨年で50周年を迎えました。旭川荘では仕事を辞めずに職場に籍を置いたままボランティアに行く「現職参加制度」があり、これまでに筆者を含め6人の職員が2年間休職して活動に参加。今回、帰国した5人の職員に当時の体験談や、その後の活動、国際交流への思いなどについてインタビューしました。　（広報委員　藤原講平）

同僚や家族らに感謝

村上 真也さん（旭川敬老園）

敬老園の手芸クラブで入居者と作業に取り組む村上さん

「現職参加」職員の第1号となった村上さんは、平成11年7月にマレーシアへ。作業療法士として障害者が通うリハビリ施設や家庭を巡回し指導する中で、同僚の支援の仕事に対する意識の違いなどに悩みました。しかし、一緒に活動することで彼らなりの「障害者に何かしてあげたい」という思いを感じはじめ、認めることができるようになったと言います。「2年間で彼らの役に立つことができたのか、思い返すこともある」という村上さん。最後まで一緒に付き合い自分を受け入れてくれた現地の同僚、快く送り出してくれた日本の家族と職場の同僚に感謝していると語ります。

マレーシアの元同僚にも勉強の機会が必要だと感じた村上さんは帰国後、江草安彦理事長（当時）にお願いし、平成13年10月から約1カ月間、2人の研修生が旭川荘で学びました。

思いやりの心教わる

田口 久美子さん（のぞみ寮）

平成15年3月から日系社会青年ボランティアでアルゼンチンに派遣された田口さん。介護福祉士として主に在宅の日系人高齢者の支援に携わりました。「現地では福祉や介護の概念がまだ根付いていないため、『何しにきたの?』と不審がられることもあり苦労した」と述懐。新聞を作って日本の福祉やサービスについて説明したところ「仲間と日本語で楽しく話せる場所が欲しい」という声を聞き、配属先のボランティアセンターでデイサービスを立ち上げました。

「現地の人の力になりたいと思いボランティアに参加したが、逆に言葉や習慣に戸惑う私は助けてもらうばかりだった。彼らは情に厚く、人を思いやる心を教わった」と語る田口さん。「日本で外国人を見かけると、自然と手伝う気持ちになる」と話します。

アルゼンチンで日系人高齢者らにレクリエーションの指導をする田口さん（右）

失敗から学んだことを活かしたい

内藤 一洋さん（旭川学園）

内藤さんは平成22年6月、ネパールの特別支援学校で村落開発普及員の活動をスタート。知的障害者向けに身近な材料を利用して教材を作成するかたわら、現地グループの協力を得て、需要のある「線香」の製品化などの就労支援にも取り組みました。「同僚や住民などいろんな人に助けられ、充実した活動ができた。コミュニケーションが最も大切」と振り返る内藤さん。一方で、自分が活動を先導したため、「現地の人たちの主体性や問題解決力を引き出すことにつなげられず反省している」とも。

職場復帰後は子どもたちの主体性を引き出すことを意識し、「意欲をもって毎日を過ごしてもらえるように努めている。現地での失敗から学んだことを活かしていきたい」と決意を新たにしています。

「旭川荘子どもまつり」で進行役を務める内藤さん

嘆くより自分にできる事を

林田 未央さん（わかくさ学園）

平成23年1月から大洋州の島国ミクロネシアで幼児教育に従事した林田さん。赴任2カ月後に東日本大震災が発生した時、「『あなたと出会ったから、日本が自分の国のように大切に思える。本気で日本を助けたい』と言って抱きしめてくれた同僚の言葉に大きな力をもらった」と話します。被災地やミクロネシアの人のために何もできない自分を嘆くより、自分にできる事を探そうと考え、ホームステイ先でも幼稚園でも、現地の文化を理解するとともに日本文化を紹介することを大切にしながら活動しました。

林田さんは、異文化体験を通じ「人は国籍や文化、貧富の差、障害の有無など、全ての境界線を越えて理解し合えることに気づいた」とJICAなどのレポートに寄稿。今もなお、県内外の講演会で多くの人たちに自身の体験談を伝えています。

民族衣装を着て自身の体験談を語る林田さん

相手の多様性を認め寛容に

今川 俊彦さん（わかば寮）

平成25年1月にマレーシアへ派遣された今川さんは、知的障害者のセルフ・アドボカシー（権利のための本人活動）を推進するグループの活性化に着手。ソーシャルワーカーとして国内約20カ所の障害者のグループを訪問し、相互のネットワーク強化にも貢献しました。今川さんは「マレーシアの社会は障害者を受容する風土があり、多様性を認めている。自分も寛容になれた」と言います。

ボランティア募集説明会で参加者の相談にのる今川さん（左）

帰国後の昨年5月には、派遣前訓練所のある福島県二本松市を訪れ、お世話になった住民約20人に体験談を紹介。同年9月には、配属先のNGOの設立10周年記念式典に出席するために再度マレーシアを訪れるなど、積極的な友好交流を続けています。

インタビューを終えて

ボランティアに参加した5人が失敗や反省も含め、それぞれの経験を前向きにとらえ、「今の自分に何ができるのか」を模索する姿に大きな刺激を受けました。これからも隊員同士の絆を深め、自身の体験を旭川荘や社会に還元できるよう努めていきたいと考えています。

協力隊50周年　岡山で記念の報告会

青年海外協力隊派遣50周年を記念した帰国報告会が1月23日、岡山国際交流センター（岡山市北区奉還町）で開催され、岡山県協力隊を育てる会会長でもある末光茂理事長が「地域人材としての青年海外協力隊の魅力」と題して講演。“現職参加”した6人の例を紹介するとともに、JICAボランティアに向けて「海外での経験を生かして新しい課題にチャレンジし、リーダーシップをとって欲しい」と期待を寄せました。

岡山国際交流センターで開催された帰国報告会

筆者も発表者の1人として、平成22年9月にマレーシアへ赴任し障害者のリハビリ施設を巡回しスポーツの普及活動に取り組んだことを紹介。同僚の要望を受け実施したフットサル大会で「障害者があんなに喜ぶ姿は初めて見た。彼らに活躍する機会を与えてくれてありがとう」と現地の人たちに喜ばれ、人生初の嬉し泣きを経験したことを披露しました。また、帰国後はJICAの行う国際協力出前講座で、小学生などにマレーシアの文化や障害者スポーツを紹介する活動に取り組んでいることも発表しました。

マレーシアの正装で発表する筆者

「旭川荘医療福祉学会」特別講演より

「知的障害者の大学教育への道」講演要旨

社会福祉法人鞍手ゆたか福祉会理事長　長谷川正人氏

講演する長谷川理事長

「カレッジ」とは、障害者総合支援法の自立訓練事業と就労移行支援事業を組み合わせた多機能型事業所。私たちは「福祉型大学」と言っている。現在、カレッジは九州と東京に5カ所あって、86人の学生たちが自立を目指して仲間とともにさまざまな体験を積み、青春を謳歌している。春には最初に開設した「カレッジ福岡」（平成24年開設）から初の卒業生を送り出す。

私には24歳になる自閉症の娘がいる。特別支援学校高等部の時、妻が「もっと勉強させたいので留年させてほしい」と学校に掛け合ったが、無理だと言われた。卒業したら娘は作業所でずっと箱折りなのかと切ない気持ちになった。

50歳で母校の大学院に進んだ時、ゼミの友人から（障害のある青年たちの学習機会拡大をめざす）滋賀県の専攻科づくり運動の話を聞いた。娘のことと、その運動のことがドッキングして、法人で学びの場を作ろうということになった。それが「カレッジ福岡」につながった。

知的障害者の支援に関わって33年。生きづらさを感じたりトラブルを起こしたりするなどして、せっかく就職したのに些細なことで離職してしまう人たちを数多く見てきた。こうした経験の中で、彼らにとっての教育年限があまりに短すぎるのではないかと気づいた。

米国やカナダ、オーストラリアなどでは知的障害者が大学に進学している。例えば米国では、学生総数の1～1.5%、学生1000人の大学なら10～15人は知的障害者を受け入れている。その背景には国連の「障害者権利条約」の存在がある。「差別なしに、一般的な高等教育を合理的配慮により提供されることを確保する」という条約の趣旨にのっとって、知的障害者にも高等教育の門戸を開いている。

平成26年10月にボストン、27年1月にロサンゼルスに行き大学を視察。同年12月にはオーストラリアのシドニー大学を訪れ、当事者学生から話を聞いた。一般学生たちと学ぶことを楽しみ「物の見方が広がった」「自立できた」と堂々と話す彼らを見て、さまざまな経験の中で自分を成長させていると感じた。

日本では普通高校卒業生の70%が高等教育に進学するのに、特別支援学校を出た知的障害者はわずか0.7%。卒業後は一般就労か福祉作業所か、選択肢は2つしかない。発達がゆるやかだからこそ健常者よりも時間をかけて学ぶ必要があり、カレッジは第3の選択肢だ。

カレッジで学生たちは何を学ぶのか。4つの目標がある。①社会に出る前に自信をつけるためいろんな経験を積むこと②仲間とともに青春を謳歌し、楽しい体験をすること③長い人生を豊かに過ごせるよう、個性や特技、趣味などを時間をかけて伸ばすこと④人に依存しなくても生活できるように力を付けること。

特別支援学校で学んだことを土台にさらなる成長を促すのがカレッジの役割だ。4年間の教育課程の中で楽観性、自己効力感、自尊感情、感情コントロール力を育て、逆境にも負けない「折れない心」（レジリエンス）の獲得を目指す。学生たちは能力に応じて漢字検定やパソコンスピード検定などにも挑戦している。合格率は約5割だが、不合格であってもその辛い経験を乗り越え、レジリエンスを身に着けている。

各カレッジは大学とも交流している。学生にとって視野が広がるという意義があり、大学生の障害者理解の促進や地域に開かれた大学づくりなど、大学にとっても大きな意味がある。東京のカレッジ早稲田には26年夏、早稲田大学の先生たちが見学に来られた。「大学の中でキャンパスライフを過ごさせてほしい」とお願いしたところ、27年4月、大学の入学式にカレッジの学生と保護者を招待してくれた。

今後、2020年までに事業所を37に増やして、どこにいても学びという選択肢が選べるような社会を作りたい。そしてインクルーシブな教育を実現させたい。12月に超党派の国会議員でつくる「障がい者の自立のために所得向上を目指す議員連盟」で講演したが、同議連では議員立法で「日本版高等教育機会均等法」を成立させることを目指している。旭川荘でも障害者の高等教育の保障に向けて取り組みを進めていただきたいと思う。

（特別講演は平成27年12月10日に開催）

旭川荘管理栄養士のいきいき健康レシピ

RECIPE 26

鮭の粕汁

酒粕パワーで体ぽかぽか

栄養量:1人分
エネルギー:120kcal
たんぱく質:10.5g
塩分:1.7g

○材料(4人分)

塩鮭(甘塩)	2切れ	だし昆布	10cm角
大根	中1/4本	水	5カップ
にんじん	中1/3本	酒粕	60g
白菜	2枚	味噌	大さじ2
しめじ	1/2パック	細ねぎ	お好みで

〈作り方〉

① 塩鮭、大根、にんじん、白菜は食べやすい大きさに切る。しめじは小房にわけておく。
② 鍋に水と昆布を入れて火にかけ、沸騰直前に昆布を取り出す。
③ ①に具材を入れ、軟らかくなるまで煮たら火を止める。だし汁で溶いた酒粕と味噌を加えたら、弱火で10分煮込む。
④ 器に入れ、小口切りしたねぎを散らす。

冬の汁物の定番といえば粕汁です。酒粕とたくさんの具を煮込んで作ります。酒粕は日本酒を仕込む際にできる「副産物」で、たんぱく質、ビタミンB1・B2、ミネラルが豊富に含まれた発酵食品です。代謝を促進してくれるほか、美肌効果も。具材の鮭には、アスタキサンチンという抗酸化作用のある色素が含まれており、血液をサラサラにしてくれます。寒い冬こそ、栄養満点な食材で体を芯から温めて免疫力を高めましょう。　(竜ノ口寮　野間淳子)

ワン ONE POINT ポイント

酒粕は味見をしながらお好みの濃さに調節してください。具材は、里芋、じゃがいも、ごぼう、こんにゃく、豆腐などを入れても美味しく作れます。

リレーコラム

旭川児童院の文化交流活動

ハンドフットボールの一場面=昭和58年

児童院では文化交流活動という病棟を超えた活動が行われています。昭和52年、「重症心身障害児の生涯学習の場を提供する」との目的で県市教育委員会から助成を受けた青年文化教室が始まりです。当時は現在のように特別支援学校高等部へ進学する道はなく、義務教育修了者の社会教育活動の場となっていました。

青年文化教室では絵画や陶芸などの造形活動、視聴覚機材を使った学習、レクリエーション、社会見学などの活動を通じて社会生活に関する知識を身に着けるとともに、可能な限り社会に触れ、経験を豊かにすることを目指しました。私が就職した昭和58年頃は教室生も若く、悩みを語り合い、時には熱い思いをぶつけ合い、青春の活気に溢れたものでした。とくにサッカーのようにゴールを競うハンドフットボールでは、身体の動かせる部分を精一杯使って頑張る姿は感動的で、職員も大きな声で声援を送っていました。入職したばかりの私はとても支援者などと言えるものではなく、彼らの生きる力に触れることで大いに励まされるなど、彼らから与えられることばかりでした。

また、青年文化教室は教室生の自主性と意欲を尊重して運営するものとされ、開設当初より自治会「つばさ会」が設立されていました。彼ら自身の提案により始まった、自作の詩にボランティアや職員が曲をつけて発表するつばさコンサートは、今年で第33回目を数え、3月10日に開催予定です。

平成15年に青年文化教室はその役割を終えて助成は終了しましたが、文化交流活動に名称を変更して活動を継続しています。今年度の睦学園との統合で、新たに2病棟が加わり、8病棟の利用者が好みの活動を通じて交流を深める成人の生涯学習の場となっています。

(広報委員　本田勝久)

親和会芸術祭開催 職員の作品210点

荘内の職員が趣味で手がけた作品を紹介する「親和会芸術祭」が1月18日から25日まで、旭川敬老園地域交流ホールで行われました。

会場には絵画や手工芸、陶芸などの応募作210点を展示。職員や利用者が、休憩時間などを利用して鑑賞に訪れました。

個性豊かな作品が飾られた芸術祭の会場

職員のプライベートな一面も発見できるこの芸術祭。手作りのおもちゃや案山子など、個性豊かな作品が並び見る人を楽しませていました。

全作品の中から芸術賞、特別賞、来場者賞など計10作品を来場者の投票で選定。最優秀の親和会会長賞には、わかば寮の秋田一子さんが出品した壁掛け「Happy Birthday My Family」が選ばれました。

木製ボードにアクリル絵の具で描いた秋田さんの作品

旭川荘ごよみ
SCHEDULE CALENDAR

2月

13日 療育発表会 ……みどり学園
医療シンポジウム ……北宇和病院
17日 卒業演奏会 ……旭川荘厚生専門学院
☆ 節分行事～各施設

3月

1～5月末 常設展（春） ……旭川荘アートギャラリー
4日 第44回卒業証書授与式 ……旭川荘厚生専門学院
10日 第33回つばさコンサート……旭川児童院
18日 旭川荘評議員会・理事会……旭川荘
☆ ひな祭り行事 / 卒業・卒園行事 } 各施設

餅つき、とんど 各施設で新春行事

「餅つき」や「とんど焼き」など、新春ならではの行事が1月上旬から中旬にかけて、荘内各施設で開催されました。

吉備ワークホーム

吉備ワークホームでは1月7日に食堂で「新春もちつき大会」が行われ、利用者と職員約50人がつきたての餅を味わいました。

餅つきは、平成22年の同ホーム創立30周年記念式典で初めて実施し、以来同ホームの新春恒例イベントとして定着。同日にあった成人を祝う会に続いて行われ、新成人の宇那木美緒さんが一番についた後、利用者と職員が交代で仕上げました。つきあがった餅は職員が手早く丸めて、きな粉とあんこをまぶして利用者に提供。「杵でついた餅はやわらかくて美味しい」「毎年ここで皆で食べるのが楽しみ」と大好評でした。

吉備ワークホームで行われた「新春餅つき大会」

あおば

旭川荘南地区のあおば（旧みどりワークセンター）では1月11日に「とんど」を行い、利用者や職員ら約30人が今年一年の無病息災を願いました。

荘内の施設や、職員の自宅から持ち寄った正月のしめ飾り約100個を施設裏庭に積み上げ点火。アルミホイルに包んだみかんやさつま芋とともに、木工製品作りの作業中に出た“失敗作”も火にくべて燃やし「今年はもっと上手に作れるように」と上達を祈りました。

とんどは、みどりワークセンターのころから毎年、利用者OBを招いて年明け最初の休日開所日に実施していて、この日も男女6人のOBが参加。とんどの周りに椅子を並べて座り、なごやかに歓談しながら焼き上がったばかりのみかんや焼き芋を味わっていました。

とんどの火で焼いた焼き芋を手にする利用者

わかくさ学園

わかくさ学園でも1月16日に「とんど祭」を開催。平成22年より毎月交流のあるNPO法人岡山園芸福祉普及協会の会員5人が来園し、子どもら約30人と一緒に正月行事を楽しみました。

最初に全員で手分けをして中庭の広場にしめ飾りを並べ、落ち葉や枯れ枝を高く積み上げてとんどを作りました。とんどの一部に火をつけるとあっという間に炎が上がり、驚いた子どもたちは少し離れた所から眺めていました。

しめ飾りの大半は、昨年12月に子どもたちが同協会の会員の指導を受けて製作したもので、園庭の畑で刈り取った稲を使用。ひらた旭川荘の施設から集めた飾りや子どもたちの書き初めも一緒に燃やし、全員で健康を祈願しました。

この他、かわかみ療護園（1月13日）とせとうち旭川荘（15日）でも「とんど」の行事が実施されました。

編集後記

「100枚のマット展」（3面に掲載）で念願の結び織りマットを購入しました。古いセーターをほどいて洗い、ウール100％の毛糸だけを使って丁寧に織り上げたマット。抜群に暖かい上に、端糸の結び目など細部まで実に美しく仕上げられていて驚きました。まさに「『もったいない』が用の美に」（愛育寮HPより）です。織工房の人たちのものづくりへの真摯な姿勢に感銘を受け、さらに温かな気持ちになりました。　（広報委員　難波久江）